

外国人の就労環境：労働市場の構造変容の中で

0 「外国人と働くということ」のまとめと、その状況を支えていた2つの前提

- ・ ある程度継続的に直接雇用されていた外国人従業員たちと同じ生産ライン上での協働
- ・ 「職の競合」という意識なし

97年のフィールドワークの前提となったその状況は、00年代後半にどれだけ一般的か？

1 バブル期の労働者流入

- ・ 終身雇用の世界と、不安定雇用の世界(「日本的経営の崩壊」という神話)
- ・ 労務倒産の危機感と、売り手市場の時代：背に腹は替えられない労働力の「穴埋め」
 - 東毛地区雇用促進協議会による直接雇用の試み：基準作りと、雇用側のメリット

2 [ポスト1997]時代：経営姿勢の転換と、労働力のフレキシブル化

- ・ 労働分配率の変動パターンの変化と、「ジョブレス(ジョブロス)・リカバリー」
 - 成果主義賃金の導入
 - 派遣労働、非正規雇用の進展：二段階の労働者派遣法改正(1999,2004)
- ・ 周縁労働力のポートフォリオ化の進行の中に位置づけられる外国人労働者
 - 「人手不足を補う」存在から、拡大し続ける不安定雇用の一角としての構造化へ
 - 「職の競合」がはじまった？

3 加速するフレキシブル化の影響

- ・ 後期資本主義時代における市場の嗜好に直結した生産＝フレキシブル化
 - 海外移転という選択と、「日本に戻る」という選択
- ・ 斡旋業者(人材派遣業)による間接雇用：日系人を中心に、製造業労働市場の主役
～バブル期の引き抜き合戦と、不況期のジャストインタイム化
派遣会社への生活世界全体の従属
：地域社会・教育環境への不適合、将来計画の放棄を帰結